

マルコによる福音書 5章 21節～34節

2015年9月24日

古本 靖久

1、聖歌 447番 「手をのばし 主にふれよう」

2、お祈り

3、聖書輪読 （新約聖書 70 ページ）

4、テキストの位置

今回の箇所は新共同訳聖書では、「ヤイロの娘とイエスの服に触れる女」の前半です。 ここでは二つの物語が同時に進んでいきます。しかし聖餐式聖書日課ではマルコ 5:22-24,35-43 が読まれますが、「イエスの服に触れる女」の部分は読まれることがありません。つまり「ヤイロの娘のいやし」だけが、ストーリーとして展開していくのです。	4:35-41	自然を支配する
	5:1-20	異邦人の地で悪霊を追い出す
	5:21-24	ヤイロの信仰（前半）
	5:25-34	イエスに寄り頼む女性の信仰
	5:35-43	ヤイロの信仰（後半）
	6:1-6a	郷里ナザレの不信仰
福音は異邦人へ	6:6b-	弟子たちの派遣

しかしこの二つの物語はもともと別の伝承だったものを、マルコ福音書の著者が編集したという考えが見られます。もしそうだとしたら、なぜそのような編集をしたのでしょうか。また二つの物語から同時に聞くことによって、わたしたちにはどのようなメッセージが与えられるのでしょうか。今回と次回の二回にわたり、じっくりと見ていきたいと思えます。

5、節ごとに

◆ヤイロの娘とイエスの服に触れる女

5:21	（そして）イエスが舟に乗って（で）再び向こう岸に渡られると、大勢の群衆がそば（彼の元）に集まって来た。（そして）イエス（彼）は湖（海）のほとりにおられた。
------	---

前回の場面、イエス様はゲラサという異邦人の多く住む場所でいやしをおこなわれました。今回は舟で、ユダヤ人の住む場所へと戻って来られます。そこには大勢の群衆がいて、イエス様を取り囲みます。この描写はマルコ福音書の中で何度も強調されます。

5:22 (そして) 会堂長の一人でヤイロという名の人に来て、(そして) イエス(彼) を見ると(て、彼の) 足もとにひれ伏して、

会堂長とは会堂の管理責任者で、礼拝における説教者や聖書朗読者、そしてお祈りの担当者をその都度決める人でした。その町におけるユダヤ人共同体の長老の中から選ばれることが多かったそうです。

会堂長には一般的に裕福で、社会的に影響力を持った人がなっていたようです。つまりユダヤ人社会の中で、とても高い位置にあった人物といえます。



ところが会堂長ヤイロは、イエス様の足元に来てひれ伏します。このような地位の人は、使いを送って頼みごとをするのが普通でした。しかしヤイロは直接イエス様に会い、ひれ伏します。このことから彼の必死な思いが伝わります。

5:23 七きりに(必死にそれを) 願った。「わたしの幼い娘が死にそうです。どうか、おいでになって手を(彼女に) 置いてやってください。そうすれば、娘(彼女) は助かり、生きるでしょう。」

幼い娘と書かれていますが、42 節では「十二歳」だと書かれています。父ヤイロにとっては、いつまでも幼いということなのでしょう。

彼はイエス様に手を置いてほしいと願います。ユダヤ教では手を置く行為は、祝福や任命の時などには見られますが、いやしとしてはそれほど多く使われません。しかしマルコ福音書の中では、イエス様が手を置く行為はたびたび出てきます。

イエス様の力が手を通して娘に伝わり、娘は必ずいやされるということを、ヤイロは心から信じていました。

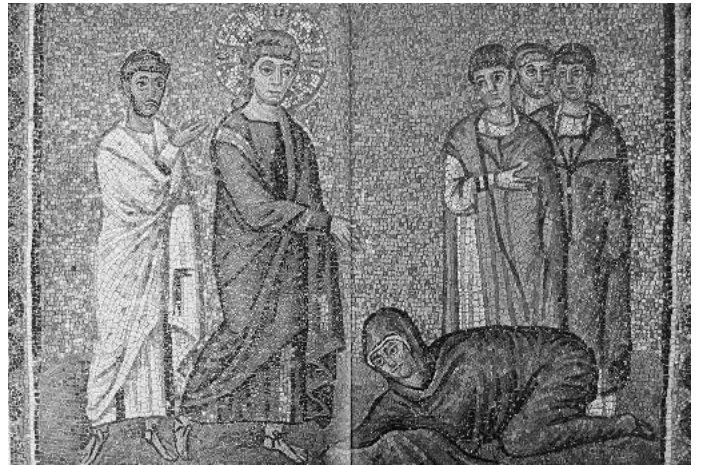
5:24 そこで、イエス(彼) はヤイロ(彼) と一緒に出かけて行かれた。(そして) 大勢の群衆も、イエス(彼) に従い、(彼に) 押し迫って来た。

イエス様はヤイロと共に出かけます。それがイエス様がヤイロに出した答えでした。イエス様の顔は今、ヤイロの娘が待つ家の方へと向かっています。ところが、「死にそうな」娘の所に行こうとする一向に、事件が起こります。

5:25 さて、ここに十二年間も出血の（が）止まらない女がいた。

ヤイロの娘の話の途中で、突然 12 年間血が止まらない女性が出てきます。彼女は、レビ記 15 章 25 節にある状態にありました。

もし、生理期間中でないときに、何日も出血があるか、あるいはその期間を過ぎても出血がやまないならば、その期間中は汚れており、生理期間中と同じように汚れる。(レビ 15:25)



つまり彼女は、祭儀的に「汚れた」状態であったわけです。彼女が触れた物も人も汚れるとされるため、様々な宗教行事にも参加できず、ユダヤ人共同体から排除されていたのです。

おそらく彼女は、前に出て来た「重い皮膚病」の人同様、社会的な孤独を味わい、12 年間を過ごしていたことでしょう。

5:26 (そして) 多くの医者にかかって (よって)、ひどく苦しめられ、全財産を使い果たしても何の役にも立たず、ますます (むしろ) 悪くなるだけであった。

どんな医者でも、彼女を苦痛から解放することはできませんでした。それどころか、彼女の状況は悪くなるばかりでした。

財産をすべて失い、頼るものもなくなってしまった。そして孤独の中にいるしかない、その状況に彼女はいたわけです。

5:27 (彼女は) イエスのことを聞いて、群衆の中に紛れ込み (いて)、後ろからイエスの服に触れた。

彼女は「汚れた」女性だったわけです。本来ならば、人に触れないように離れて暮らさないといけませんでした。

しかし、彼女はイエス様に頼りたかった、いや、頼るしかなかったのです。だから、イエス様のうわさを聞いて、イエス様に近づこうと決めたのです。そのためには群衆をかき分ける必要がありました。それは、社会的な、また祭儀的な境界線を越えることも意味しました。

5:28 (なぜなら)「この方の服にでも触れればいやして(救って)いただける」と思ったからである。

日本にも何かに触れると御利益があるという考え方があります。例えば通天閣のビリケンさんは、みんな足を搔いているようです。

では彼女はどのような気持ちで、イエス様の服に触れようとしたのでしょうか。いやして欲しい、その気持ちは強く持っていたと思います。本来なら、ヤイロのようにイエス様の前に行き、堂々と自分の今の状況を告げ、いやしを懇願したことでしょう。

でも、この女性はそれをする事ができませんでした。「汚れ」の中にある自分が、正面からそのようなお願いをすることなど、出来ないと感じたのです。その途中で群衆に止められるでしょうし、イエス様に迷惑を掛けてしまうかもしれない。なぜなら、汚れた者が触れた人もまた、汚れるのですから。

ヤイロの家に向かうイエス様に従う群衆たち。その人たちがイエス様と彼女とを隔てる厚い壁になっていました。だから彼女は、「そっと」後ろから近づきました。だから彼女は、イエス様に気づかれぬように、服に「そっと」触れたのです。

5:29 すると、すぐ(彼女の)出血が全く止まって(血の源が枯れ)、(彼女は)病気がいやされたことを(自分の)体感じた(で知った)。

女性はすぐにいやされました。イエス様から力が入ってきたのでしょうか。そのことに彼女自身気が付きました。

ここですぐにヤイロの物語に戻ったら、すべて問題なく終わっていたかもしれません。女性も何食わぬ顔で元の生活に戻れたかもしれません。

5:30 (そしてすぐに)イエスは、自分の内から力が出て行ったことに気づいて(を知り)、群衆の中で振り返り、「わたしの服に触れたのはだれか」と言われた。

しかしイエス様は振り返ります。ヤイロの家へ向いていた体を180度回転させるのです。イエス様の体から、いやしの力は出ていきました。そのことに気づき、問われるのです。だれがわたしに触れたのかと。

この時、ヤイロは近くにいたはずですが。彼の気持ちはどうだったのでしょうか。

5:31 そこで、(彼の) 弟子たちは(彼に) 言った。「群衆があなたに押し迫っているのがお分かりでしょう (を見て、)。—それなのに、『だれがわたしに触れたのか』とおっしゃるのですか。」

弟子たちは思いました。「これだけ群衆が来ているんだ。だれか触っても仕方がないだろう」と。人通りの多い所で因縁をつける人のように、イエス様を見ているのでしょうか。

マルコ福音書はイエス様の力に無理解な弟子たちを強調して描きます。この弟子たちがイエス様に抗議する場面も、その一つです。マタイ福音書がこの場面そのものを省き、ルカ福音書が「それなのに～」から先を除いているのは、弟子批判を和らげたいからでしょうか。

5:32 しかし、イエス(彼)は、触れた(このことをした)者を見つけようと、辺りを見回しておられた。

弟子たちはイエス様が「自分に触れた者」を捜すことを、妨げようとしてしました。その理由の中には、ヤイロのためにイエス様に先を急がせたかったからだということもあるでしょう。

しかしイエス様は辺りを見回します。イエス様はどのような力がご自分の中から出たか、わかっておられたのかもしれませんが。だとすると、いやされた人がどのような状況の人であったのかも、知っていたのでしょうか。

イエス様はこの女性と「出会う」ことを求められました。イエス様のそのまなざしが、彼女の姿を求め、彼女との関わりを求めたのです。

5:33 女は自分の身に起こったことを知って恐ろしくなり(れ)、震えながら進み出て(来て彼に)ひれ伏し、すべて(真実)をありのまま(すべて)話した。

彼女はなぜ恐れ、震えたのでしょうか。きちんと請願も立てずにいやされたから、そのことを非難されると思ったのでしょうか。それとも、「汚れた」自分が、イエス様の服に触れてしまったことを非難されると思ったのでしょうか。

それもあるかもしれませんが。しかしここで彼女が恐れ、震えた一番の理由は、イエス様の中に、神さまの力を感じたからではなかったのでしょうか。

聖書には、神さまのみ手が伸べられた時に「恐れる」人が出てきます。イエス様の母マリアもその一人です。しかし恐れと同時に、喜びや希望をも感じるような気がします。

5:34 イエス（彼）は（彼女に）言われた。「娘よ、あなたの信仰（信頼）があなたを救った。安心して（平和に）行きなさい。（そして）もうその（あなたの）病気にかからず（からいやされ）、元気に暮らせ（でい）なさい。」

「娘よ」とイエス様は語りかけます。25 節と 33 節に出てくる「女」は、年齢や身分など関係のない、性別としての「女」を意味します。しかしここで出てくる「娘」という語は、父親から見た子どもとしての「娘」という意味を持ちます。つまりここでイエス様は、家族の一員としてこの女性と呼ばれました。

「あなたの信頼」とは何でしょうか。新共同訳聖書では「信仰」と訳されていますが、信仰といいますと、ニケヤ信経とか教会問答を思い出してしまうので、あえて「信頼」と訳しました。彼女は信じたのですね。イエス様の服にでも触れることができたなら、いやされると。そして群衆の壁を越え、イエス様の元に行った。それが彼女の、イエス様に対する無条件の信頼だったのです。

そしてイエス様は言われます。「平安に行きなさい」と。平安、それはヘブライ語シャロームの訳語です。シャロームとは、神さまとの正しい関係の中にあることを言います。彼女は肉体がいやされただけでなく、これから先、神さまのみ守りの内に歩いていくことをも約束されたのです。

<今日の箇所から>

12 年間社会から見捨てられた女性はもう、イエス様にすぎるしかありませんでした。その状況を克服したいと思い、彼女の方からイエス様に近づいていきました。しかしイエス様は、いやしの後に彼女を捜しました。そしてイエス様は彼女に、肉体的ないやしだけではなくもっと大切なものを与えられました。

カトリックの修道院などに行くと、「十字架の道行き」というものがあります。その中に、イエス様の顔を白い布で拭ったヴェロニカという聖書には出てこない女性がいます。このヴェロニカが、今日の女性と同一人物という伝説があります。ニコデモ福音書という書物の中で、イエス様の裁判の場で、「自分はイエス様にいやしていただいた」と証言するのです。

この伝説の真偽はともかく、わたしたちも彼女のように、イエス様に頼り、すべてを委ねて歩んで行きたいと思えます。どんなに高い壁があろうとも、イエス様に触れさえすればという信頼をもっていければと願うのです。さて話は変わりますが、ヤイロは今、どんな気持ちでいるのでしょうか。これから一か月間、ヤイロの気持ちになって過ごしてみましよう。

今回の学びはこれで終わります。次回は 10 月 22 日(木)10 時 30 分からです。「ヤイロの信仰（後半）」（マルコ 5：35～43）について学んでいきます。